

ローズマリ・サトクリフの『第九軍団のワシ』 における傷と痛み

川崎 明子

1 作者と作品紹介

1.1 作者サトクリフについて

ローズマリ・サトクリフ (Rosemary Sutcliff, 1920-92) は、イギリス児童文学における特に歴史物語の分野で代表的な作家である。中でも、ローマ帝国の属州時代のブリテン島を舞台とするローマン・ブリテン三部作、『第九軍団のワシ』 (*The Eagle of the Ninth*, 1954)、『銀の枝』 (*The Silver Branch*, 1957)、『ともしびをかかげて』 (*The Lantern Bearers*, 1959) が名高い。『ともしびをかかげて』は権威あるカーネギー賞も受けた。本論文で扱う『第九軍団のワシ』は、サトクリフの代表作といってもよい小説であり、日本でも翻訳により親しまれ、2011年にはケヴィン・マクドナルド監督により *The Eagle* (邦題『第九軍団のワシ』) として映画化された。

サトクリフは海軍軍人の娘としてサリー州に生まれた。父方も母方も医者が多い家系である。2歳の時スタイル病に罹患し、通院や手術入院を繰り返しながら、車椅子中心の生活を送る。幼年期は、病床上で母の朗読する小説や神話をよく聞いた。後に自伝『思い出の青い丘』 (*Blue Remembered Hills*, 1983) の中で、自分はポター、ミルン、ディケンズ、ステイーヴンソン、アンデルセン、ケネス・グレアム等の影響を受けたと書いている。特にキプリング (Rudyard Kipling, 1865-1936) の『プークが丘のバック』 (*Puck of Pook's Hill*, 1906) の中のローマ時代の物語が、『第九軍団のワシ』執筆に繋

がったという。¹ 個人経営の学校に通った後、14歳から美術学校で学び、細密画家となる。第二次世界大戦の終わり近くに物語を書き始め、文学に転向し1950年に作家デビューする。サトクリフ自身は、結婚を考えた恋人と破局した時に受けた傷のために、アマチュアからプロの作家に成長できたと分析している。² 以降、子どものための歴史小説を中心とする多数の作品を世に送った。それらの作品には、彼女自身と同様に、傷や障害を持つ人物が数多く登場する。

1.2『第九軍団のワシ』梗概

『第九軍団のワシ』は、紀元後127年から129年頃のローマ属州ブリタンニアに展開する。主人公はローマ軍の百人隊長マーカス・アクイラ (Marcus Aquila)。³ 代々軍人の家系でエトルリア出身である。その父は故郷を出て、第九ヒスパナ軍団の大隊司令官としてここブリテンに赴任した。117年に原住民が反乱を起こし、第九軍団はその鎮圧のために北方へと出発し、その後二度と戻ることはなく、真相は未だ謎である。物語は、父の失踪当時子どもだったマーカスが成長し、筆頭百人隊長として初の指揮を執るべく、イスカ・ダムノニオルム (現エクセター) の駐屯軍に赴任するところから始まる。しばらくは平穏な日々が続くが、ある時突如原住民が蜂起し攻撃をしかける。マーカスは勝利のために、決死の勇で戦車に体当たりし、車輪に取り付けられた鎌の刃によって脚に大怪我を負う。その捨て身の尽力の結果、戦いには勝利したものの、この赴任後の初戦で早くも退役となる。

その後、やはり軍人で今は引退している父の長兄アクイラ伯父の住むカレバ・アトレバートゥム (現シルチェスター) で療養する。失意のマーカスを鼓舞しようと、伯父はミトラス神の誕生日である12月25日に、サトゥルヌス

¹ *Blue Remembered Hills*, Chapter 7, 53-54.

² *Blue Remembered Hills*, Chapter 17, 140.

³ 本論文における人名、地名、役職名の表記は基本的に猪熊葉子訳に従う。

祭恒例の剣闘士試合の見物に甥を連れ出す。円形闘技場の観客席で、マークスはアクイラ家の隣に住むイケニ族の少女コティア（Cottia）を目にする。イケニ族は、紀元60年頃にローマに激しい反乱を起こした女王ボウディッカを出した氏族である。コティアは、父が死に母も再婚したために、おじとおばに養育されている。剣闘士たちが顔見せに入場すると、マークスはある剣闘士の姿に目を奪われる。自分と同じ年くらいのブリテン人で、耳には奴隷のしるしがあった。その剣闘士も、大勢の観客がいる中でマークスを見つめ返す。これがエスカ（Esca）である。エスカの試合になると、マークスの負傷した脚が痛む。しばしの死闘の後エスカは敵に追い込まれる。剣闘士試合では、死に際の剣闘士は慈悲を乞うことができ、その戦いぶりを見た観客の判断が助命か処刑かの決定に影響した。⁴ しかしエスカは助命を乞う仕草をしない。死を覚悟したエスカの姿を見たマークスは、観客に向かって必死に慈悲を呼びかけ、結局エスカは助命される。

命拾いしたものの剣闘士としての生命は失ったエスカを、マークスは自分の専属奴隷として買う。ある時エスカは身の上話をする。実は自分は度々ローマに反乱を起こしたブリガンテス族の長の息子である。ある反乱で、エスカの父は死に、自分も含め、生き残ったわずかな者は奴隷となった。そしてマークスが驚いたことに、エスカはマークスの父が率いるヒスパナらしき軍団と、ローマ軍の象徴である旗印のワシを見たという。ワシはローマ大神ユピテルの象徴であり、ローマ軍の持つワシは、マークスが後にコティアに説明するように、軍の「命そのもの」（the very life of a Legion）である。旗印のワシが敵に奪われたとしたら、それはいつかブリテンの諸原住民族が結束してローマに反乱を起こす祭に悪用される可能性がある。エスカの話をきいたマークスは、行方不明になったワシの奪還を決心する。

その後、マークスは脚の大手術を済ませ、眼医者と偽りハドリアヌスの長城を北に越えてローマ領を出、患者を見つけて治療を施しながら、エスカの

⁴ 本村、208頁。

協力のもと、消滅した軍団の行方を追う。ある時、第九軍団からの脱走兵グアーン (Guern) に出会う。グアーンによると、第九軍団の兵士の質が落ちたところに、トラヤヌス帝がブリテンから軍を引き上げたため国境の守りが手薄となり、司令官に対する暴動が起き、さらに原住民の反乱が起きて、ついに軍団は壊滅状態となった。最後まで旗印のワシを守ろうとしたマーカスの父は殺され、ワシはエピダイ族に奪われたという。マーカスとエスカは、さっそくエピダイ族の住む方へ移動し、族長の息子のしつこい眼病を治療するという名目で長期滞在する。二人はついに、ワシが彼らの崇拜の対象となっていることを突き止める。部族の盛大な祭りの夜、二人は両翼を失ったワシを神殿から持ち出す。エピダイ族に激しく追跡され、マーカスの痛む脚に苦勞しながらも、二人は再びハドリアヌスの壁を越え、ワシをローマ領に持ち帰る。

伯父の友人である第六軍団総司令官クローディウスの助言に従い、結局ワシは伯父の家の床下に秘密裏に収められる。二人が英雄として公的に賞賛されることはないが、エスカは晴れてローマ市民となり、マーカスも父の無念を晴らし、ローマ帝国の安寧に間接的に貢献したことに満足を感じる。マーカスは、故郷には戻らずここブリテンに留まり、コティアと結婚しエスカと共に奴隷労働に頼らぬ農業を営むことにする。

2 痛みの非共有性と共有性

『第九軍団のワシ』のプロット展開において重要なのが、マーカスの負傷とその後の痛みである。傷と痛みについて具体的な議論に入る前に、痛みとは何かという問題を考えたい。慢性疾患の多い現代においては、医学、医療人類学、社会学、文化研究などの諸分野で、痛みに関する研究がなされている。そのうち古典的な *The Body in Pain* (1985) でエレイン・スキヤリーは、特に戦時の拷問における痛みを分析しながら、痛みの意味や政治性を鋭く論じている。スキヤリーが痛みの本質的特徴として指摘するのは、その非共有

性と言語化の困難である。人は自分の痛みには敏感だが、他者の痛みを理解することは難しい。⁵ そもそも他者の痛みは目に見えない。⁶ その上他者に伝えにくく、痛みは言語以前のうめきに留まり、痛みの中にある人の言語体系は崩壊する。⁷ 何とか痛みを言語化できる時は、「であるかのような」という表現が多く、特に武器の比喩がよく使われる。例えば、「まるで腕の関節が全部外れて、裂けた先端が皮膚から突き出るような感じ (It feels as if my arm is broken at each joint and the jagged ends are sticking through the skin)」⁸ といったようにである。

他方モスコフスは、最近の研究で、痛みの非共有性ではなく共有性に注目する。痛みには演劇の持つ全要素があり、解剖室や処刑場などで加害行為が展開する見世物、すなわち「痛みのドラマ」においては、一定の条件の下、害を受ける人（役者）の痛みは、それを見る人（観客）に伝わるといっているのである。⁹ 時代によって痛みの持つ文化的側面は違うという前提に立ち、モスコフスは中世末期から現代までを論じるが、そのうち18世紀の痛みのドラマを分析した第3章「共感」(Sympathy)における分析は、『第九軍団のワシ』の円形闘技場における剣闘士試合の場面を考える上で、多くの示唆を与えてくれる。

スキヤリーのいうように、確かに痛みには基本的に非共有性や言語化の困難が伴うと筆者も考えるが、『第九軍団のワシ』においては、それらは第一の問題とはならない。本作品はマーカスを焦点人物とする三人称の語りを採用しており、語り手がマーカスの痛みを表現することができるからである。もしこの小説が一人称の語りを採用していたら、若く無骨な軍人マーカスが、負傷の痛みを上手く言語化できたかどうか、できたにしても人に伝えたかど

⁵ Scarry, 4.

⁶ Good, Brodwin, Good, Kleinman, 139.

⁷ Scarry, 4, 6.

⁸ Scarry, 15.

⁹ Moscoso, 6-7.

うかは疑問である。『第九軍団のワシ』の分析においては、モスコースの主張する観客と犠牲者の関係が、円形闘技場の場面における観客一般と剣闘士たちの間に成立していることを前提とする方が、物語の核心に近づく助けとなろう。しかし、後述するように、この観客と犠牲者の関係において、マーカスとエスカに限っては、典型的な法則から逸脱しているのである。この独特な痛みの扱いは、『第九軍団のワシ』の特徴の一つでもある。

3 マーカスはなぜ負傷するのか

痛みについて具体的に考察する前に、そもそもなぜマーカスがこの小説において負傷しなければならないかを考えたい。夢を見つけその実現のために努力することは、少年少女のための読み物にふさわしい主題であることは確かだが、ワシ奪還という主題のために、なぜマーカスの負傷が設定されるのであろうか。

3.1 文民によるローマ軍への貢献

マーカスが負傷する理由として、小説内部の展開という観点から見て明らかなのは、国境を越え安全に移動する方法を知るためである。マーカスは、自分の脚の手術を行うガラリウスから、眼医者であればローマ領の外でも比較的自由に移動できることをきいて眼医者と偽ることを決心し、さらに出発前には薬の入手法や治療法を教えてもらう。

マーカスが負傷するもう一つの理由は、ローマ軍、ひいてはローマ帝国のために、私人として働くことを可能にするためである。父が最後まで守り抜こうとしたワシをマーカスが奪還する場合、軍に籍がある限り、それも百人隊長というそれなりの地位がある限り、独自に決行することは難しい。組織化された軍隊において、職業軍人の個人性の発揮は不要かつ禁忌であるからだ。イギリスでは17世紀から18世紀にかけて職業軍人が出現したが、職業軍人は、中世の騎士とは異なり、独立して自分のための栄光を求めることはで

きず、自己の野心は抑え、上官の命令に従わなければならなかった。¹⁰ 重要なのは個人の名誉欲でなく、規律ある愛国精神と専門的な技術である。¹¹ 高度に組織化された強大なローマ軍においても、軍全体の秩序と利益が優先され、軍人の独自行動は制限されるものであろう。この点において、マーカスは軍に戻れない身体的条件を持つことにより、間接的にローマ軍全体の利益にもなるような個人的課題に挑戦することができるのである。

より厳密にいうと、父の名誉の回復という目標も、アクイラ家とその「ワシ」という名が示すとおり軍人の家系であり、マーカスが徹頭徹尾兵士の精神性を持っているために、完全に個人的なものではない。ワシ奪還が、ローマ軍とアクイラ家とマーカス個人の共通の課題であることは、次のように示される。マーカスが伯父を訪問中の第六軍団の総司令官クローディウスに出発命令を乞う場面である。

The very life or death of his father's Legion was at stake; the Legion that his father had loved. And because he had loved his father with all the strength of his heart, the matter was a personal quest to him and shone as a quest shines. But beneath that shining lay the hard fact of a Roman Eagle in hands that might one day use it as a weapon against Rome; and Marcus had been bred a soldier. So it was in no mood of high adventure alone, but in a soberer and more purposeful spirit that he awaited the verdict. (*The Eagle of the Ninth*, Chapter 10, 126-7.)

このようにローマ軍とアクイラ家とマーカスの運命が一つとなる中、ワシの奪還は、軍に戻れないマーカスが代わりにできること、彼だから信念をもつ

¹⁰ Thomas, 64.

¹¹ Thomas, 74.

てやり遂げられること、彼ならば許されることなのである。慢性の痛みの研究において、病気によって変化を余儀なくされた人々には従来のアイデンティティを維持しようとする傾向があることが指摘されている。病気の人、違う人間に変えられたのに、引き続き同じ人間であるという二重性を生きるのである。¹² マーカスはこの二重性に直面する中で、文民・私人としてローマ軍のために働くという、彼の持つ条件の中で最高かつ唯一といってよい目標を見つけたといえよう。

3.2 第一次世界大戦と第二次世界大戦の影響

ワシ奪還が、軍人との高い類縁性を持つ文民によるローマ軍への貢献であるという設定は、マーカス個人に課題を提供すると同時に、本作品執筆・出版当時のイギリスの人々の感受性に適うものでもある。その感受性を形成する最大の要因は、二つの世界大戦である。

イギリスにおけるローマ帝国観は、各時代の風潮やイデオロギーにより変化してきた。ローマン・ブリテンの専門家である南川によると、ルネサンス時代以降のイギリスにおいて、自由と市民的平等や古典文明の発祥の地というイメージを持つギリシアと比べると、独裁政治、退廃、衰退のイメージを持つローマ帝国の評価は、あまり高くなかった。ヴィクトリア女王が1877年にインド皇帝となり、ローマ皇帝と似た性格を帯びたため、否定的なローマ帝国観が多少揺らいだものの、紀元60年頃ローマに反乱を起こしたイケニ族の原住民女王「ボウディッカ」が古代語で「勝利」を意味することから、同じ意味を持つ「ヴィクトリア」女王と結びつけられ、基本的にはローマに抵抗した側が支持された。ところが19世紀末から、イギリスの思潮はゲルマン神話から離れ、ローマ人やローマ帝国に接近し、その文化的子孫であることを強調するようになる。その原因は、ゲルマン系であるドイツに対する脅威

¹² Linda C. Garro, "Chronic Illness and the Construction of Narratives" in Good, Brodwin, Good, Kleinman, Chapter 5, 104.

が増大したためと、イギリスの世界支配が翳りを見せ始め、帝国没落の観念がイギリスとローマ帝国の連想を強くし、「イングリッシュネス」のうち、民族の起源としてローマ人が含まれるようになったためである。¹³ ドイツとの二つの戦争を経た後の1950年代のイギリスにおいて、ブリテン島在住のローマ人を主人公とするローマン・ブリテン三部作が出版されたのも、このようなローマ帝国への親しみの高まりと無縁ではないだろう。

二つの世界大戦における兵士と民衆の環境はどのようなものであったらうか。第一次世界大戦より、募兵制は徴兵制に移行したが、戦後の兵士の動員解除は緩慢で、兵士たちの不満が募った。復員後も、元兵士たちは生活の窮状に激しく憤った。1921年に200万人に急増した失業者の約半数は、元兵士であったという。¹⁴ 第二次世界大戦では、徴兵年齢は18歳から50歳に拡大し、41年末から女性も徴兵対象となった。前大戦と違い、戦争遂行への国民の支持は一貫して高く、軍隊からの逃走率も半減したことから、第二次世界大戦は「民衆の戦争」と呼ばれることもある。第一次世界大戦が国民の愛国心に訴える「国王と国のための戦い」であったのに対し、第二次世界大戦はドイツ、イタリア、日本という国内で民主主義を圧殺し対外的には侵略行動に走る諸国に対する「反ファシズム戦争」の性格を持ち、その大義が人々の戦争協力姿勢を支えた。¹⁵ 君主や国家を重視する戦争から民衆が主体的に支持する戦争に変化したことは、マーカスのワシ奪還が、ローマ帝国への貢献かつ個人的探求という複合的な課題であることと、全体としては呼応しているように思われる。ちなみに、障害を負った退役軍人への関心は、それまでも常にあったが、ノーマライゼーションの風潮とも連動して特に20世紀に高まった。¹⁶ マーカスの属性は、サトクリフ個人の身体的条件のみならず、こ

¹³ 南川、4～7頁、52頁。南川はローマ人やブリトン人の側に立った作家としてサトクリフにも言及している。南川、19～20頁。

¹⁴ 木畑洋一「第9章 福祉国家への道」、川北、337頁、346頁。

¹⁵ 木畑洋一「第9章 福祉国家への道」、川北、364～366頁。

¹⁶ Gerbar, 2.

の関心の流れにも沿うものである。

1920年生まれのサトクリフは、第一次世界大戦の余波を感じる時期に生まれ落ち、物事が判断できる年齢になってからは第二次世界大戦を経験している。さらに、サトクリフの父は海軍の軍人であったので、サトクリフの記憶にある父の仕事の大部分が戦争に直結していた。父は比較的若くして退役したが、第二次世界大戦が始まると呼び戻されている。¹⁷ 二人のおじは第一次世界大戦で戦死し、お婆の一人は戦時中ボランティアの看護師となった。¹⁸ サトクリフは、第一次世界大戦で顔の大部分を吹き飛ばされた道路工夫と顔見知りであったし、同じ戦争で盲目となった物理療法士の治療を受けに行ったこともある。¹⁹ 身体的制限のために徴兵に応じることはできなかったが、兵士に手作り品を送る活動をしていた作業チームを自らの意志で手伝った。サトクリフが住んでいた北デヴォンの田舎は、全体として安全で平和であったが、自宅は内地防衛隊の地方分隊の信号所となる。²⁰ 先述したように、既に細密画家として立っていたにもかかわらず、第二次世界大戦中に小説を書きたいという欲求が高まり、戦争が終わる頃に書いた物語が10年以上経って『第九軍団のワシ』に結実した。²¹ 児童文学において、二つの世界大戦を扱った作品のほとんどは、第二次大戦後に書かれているという。戦争物語作者のうち、最も重要な位置を占めているともいわれるサトクリフによる『第九軍団のワシ』は、直接20世紀の二つの世界大戦を描くことはないが、児童文学における多数の戦争物語群の誕生という歴史的流れにも位置づけられる。²² このようにマーカスの負傷は、物語内部の展開が要請するものであると同時に、執筆当時の環境が用意したものである。

¹⁷ *Blue Remembered Hills*, Chapter 10, 72; Chapter 14, 107.

¹⁸ *Blue Remembered Hills*, Chapter 5, 34-35.

¹⁹ *Blue Remembered Hills*, Chapter 13, 102; Chapter 16, 130.

²⁰ *Blue Remembered Hills*, Chapter 14, 109.

²¹ *Blue Remembered Hills*, Chapter 15, 118, 121.

²² 佐久間良子「21 戦争物語」、日本イギリス児童文学会、第1巻、121頁。

4 作品における痛み

それではマーカスの経験する痛みの経験を、戦闘における負傷、円形闘技場での脚の痛み、脚の手術、ワシ奪還中と奪還後の順に見ていこう。

4.1 負傷

原住民の反乱において、マーカスは戦車の車輪についた鎌の刃によって、右腿に決定的な傷を受ける。彼が戦車の下敷きになり「裂け目のある暗闇に包まれた (the jagged darkness closed over him)」ところで第3章は終わる。2で引用したスキャリーが出した例にも「jagged」という単語があるが、この後もこの単語は頻出し、傷と痛みに関連した形容詞の一つとなる。続く第4章冒頭では、痛みは次のように表現される。

On the other side of the darkness was pain. For a long time that was the only thing Marcus knew. At first it was white, and quite blinding; but presently it dulled to red, and he began to be dimly aware of the other things through the redness of it. People moving near him, lamplight, daylight, hands that touched him; a bitter taste in his mouth which always brought back the darkness. But it was all muddled and unreal, like a dissolving dream. (*The Eagle of the Ninth*, Chapter 4, 43. 以下引用における下線部は筆者による)

暗闇の反対側に痛みがある。暗闇は死に通じる意識の喪失を、痛みは生を表すだろう。痛みを感じることは、生きていることの証左だからである。痛みは最初は白く、目を開けられないほどの強さである。この'blinding'という単語は、強い痛みを表現するのによく用いられる形容詞である。間もなく光は赤色に落ち着くが、ランプの明かりや日光など、知覚対象は一貫して光である。次に自分に触れる手が見え触覚が目覚め、苦い薬を飲まされ味覚も感じ

る。このように触覚や味覚を使った表現も登場するが、この場面、そして物語全体において最も重要な感覚は、光に関連した視覚である。

一週間ほど経つと、痛みは全世界を包む外的なものではなく、マーカスの身体、それも限られた部位に集中する、内部的なものになっている。

So he was not dead, after all. He was faintly surprised, but not very interested. He was not dead, but he was hurt. The pain, which had been first white and then red, was still there, no longer filling the whole universe, but reaching all up and down his right leg: a dull, grinding throb with little sparks of sharper pain that came and went in the dullness of it. It was the worst pain that he had ever known, save for the few blinding moments when the brand of Mithras pressed down between his brows; but he was not much more interested in it than in the fact that he was still alive. (*The Eagle of the Ninth*, Chapter 4, 44)

マーカスの右脚で痛みはがんと軋み、痛みの火花を散らす。医師の説明では、腿の骨が砕け筋肉がずたずたに引き裂かれている。興味深いのは、マーカスがこの非常に強いであろう痛みのことを、昨年12月のサトゥルヌス祭の儀式で経験した痛み以外ではこれまでで最悪のものと感じていることである。ミトラスは、ペルシアの光の神で、ローマでも、特に軍隊において信仰された。この教えの本義を体得するためには七つの修業を通過せねばならず、そのうち第一の段階がカラスの関門である。²³ マーカスの眉間にある傷跡は、彼がこの第一関門に及第したことを表している。光の神の信仰に関する関門にふさわしく、先の引用でも使われた‘blinding’と形容される痛みが、そのような痛みを感じるのに最もふさわしい眉間に与えられたのである。

23 猪熊の註を参照。『第九軍団のワシ』第1章、29頁。

このように痛みは、生の証左であり、光であり、その光はローマ軍人にとって信仰の対象であり、跡を残すものであり、さらには目的を遂げる上で必要な通過対象である。マーカスは眼医者を偽ることでワシ奪還を達成する。眼病の治療をし人々の目に光を取り戻しながらワシを奪還することは、ローマ帝国の平和に間接的に貢献しブリテン島の光を守るにふさわしい方法である。ローマ帝国側の認識では、外地を支配しローマ化することは、現地を文明化することであり、マーカスも同じ価値観を持っているからである。ローマがもたらした光を守るという主題は、題が示す通り『ともしびをかかげて』でより大規模にドラマ化される。夏が終わり伯父の家で痛みの消えない秋を過ごした後、マーカスはミトラス信仰の第一関門を通過した一年前を回想する。そして翌日のミトラス神の誕生日である12月25日に、円形闘技場で光を見つけることになる。

4.2 円形闘技場で

円形闘技場でマーカスが、後に親友となるエスカと妻となるコティアの姿に見て取ったのは、共通して恐怖であった。物理的距離がありながら、マーカスが二人に反応するのは、やはり視覚を使っただけのことである。試合に出場する剣闘士たちが顔見せに立ち並ぶ中、マーカスとエスカの目が合う。

‘This man is afraid,’ said something deep in Marcus. ‘Afraid — afraid,’ and his own stomach cringed within him. (*The Eagle of the Ninth*, Chapter 5, 63)

恐怖を感じているのはエスカであるが、マーカス自身が恐怖を感じているかのように胃が締め付けられる。ふとコティアに目をやると、その顔が恐怖で凍り付いている。エスカと目が合ったことに動揺したマーカスは、少女を剣闘士試合に連れ出したコティアのおじとおばに対して強い怒りを覚える。いよいよエスカが出場するが、防具や武具の観点からして、二人の剣闘士は一

見平等に見えて、最後には相手の網闘士が勝つ可能性が高い。マーカスの負傷した右脚は痛んでいた。

A few moments earlier, Marcus had known that his damaged leg was beginning to cramp horribly; he had been shifting, and shifting again, trying to ease the pain without catching his uncle's notice, but now, as the two men crossed to the centre of the arena, he had forgotten about it. (*The Eagle of the Ninth*, Chapter 5, 65)

恐怖を感じているのも、試合で痛みを感じるのもエスカであるはずだが、マーカスの負傷した脚は、エスカの代理であるかのように痛む。エスカの恐怖がマーカスの痛みに変換されることで、エスカの恐怖が事実として表現される。案の定エスカは網に絡め取られる。そしてマーカスの座席の真下に倒れ、網越しにマーカスを直視する。マーカスは自分が試合をしているかような戦闘心でもって、エスカの助命を求めるよう観客を導く。ついに助命が決まると、マーカスは再び痛みの中に戻っていく。

Marcus drew a shuddering breath, and relaxed into a flood of pain from his cramped leg, as an attendant came forward to disentangle the swordsman and aid him to his feet. He did not look at the young gladiator again. This moment was shame for him, and Marcus felt that he had no right to witness it. (*The Eagle of the Ninth*, chapter 5, 67)

このようにマーカスの脚の痛みは、エスカの試合の前後に現れ、試合中は忘れられる。ここで自分と似た人物であるエスカの姿に集中し、彼と一体化することで痛みが緩和されることが示唆される。直後にエスカを奴隷として買うのも、そのことを直感したためであろう。

先ほど言及したモスコソの指摘する18世紀の見世物における観客と犠牲者の関係は、この闘技場の場面における観客一般と剣闘士たちの間にも成立している。そもそもローマの円形闘技場は、人間や動物が害を加えられる様子を観客が見物することを目的として作られた、モスコソのいうところの「痛みのドラマ」の典型的かつ最大の舞台ではないだろうか。モスコソ曰く、痛みのドラマにおいては、観客にも役割がある。観客が傷つけられる者の感覚的経験を共有するのは不可能ではない。それどころか、そもそも人は目の前で展開する他者の激しい苦痛に無反応ではいられない。犠牲者も自分が観客に見られていることを意識する。しかし観客は、犠牲者が傷つけられるのを、自分たちの同類としてではなく見世物として経験する。そして見られることなしに犠牲者を見、評価されることなしに見世物を評価する。²⁴

本物の武器を持ち死闘を繰り広げる剣闘士たちを目前に、観客は全く同じ痛みを感じることはできなくとも、痛みに反応することはできるだろう。むしろ反応せずにはいられないはずである。しかしマーカスとエスカの間には、このような反応とはまた別の例外的な関係が展開する。まず、マーカスは、観客のようにこれから来るはずの未来の痛みを予測して興奮するのではなく、現在のエスカの恐れを自分の身体にある傷の痛みとして感じている。マーカスが反応せずにはいられなかったのは、エスカの痛みではなく恐れなのだ。実際エスカはこの試合では大きな怪我をしない。またマーカスは、群衆とは違って、エスカを見物の対象としてではなく同類として見ている。いずれも戦いのリーダーであった父を失い、母も失った。二人とも死闘の末、生き延びることこそできたものの、闘士としては完敗した。

そもそもローマ軍の兵士と剣闘士には多くの相似点がある。剣闘士のうち「新参者」(tiro)が最初の戦いで生き残ると「経験者」(veteranus)と呼ばれた。²⁵「経験者」は「退役軍人」(veteran)と同じ言葉である。古代ロー

²⁴ Moscoso, 55-58.

²⁵ 本村、166～167。

マでは、軍隊も訓練も「エクセルキトゥス」、すなわち「エクササイズ」と呼ばれたが、これは軍隊が常に訓練していたことの表れである。²⁶ 剣闘士は、日々の身体的訓練を要するもう一つの職業であり、実際兵士と同じ訓練を一部行っていた。²⁷ 剣闘士の武具には、ローマ軍団の兵士の武具に似ているものもあった。²⁸ 実際手術後のマーカスは、エスカと一冬「円形闘技場に出場するかのように」(as though for the arena) 訓練し、「剣闘士のように丈夫に」(as hard as a gladiator) なったとある。

このように同類としてのエスカの気持ちを直感したからこそ、マーカスは彼が網を解かれる屈辱の瞬間から目を逸らす。二人に個人的な関係が成立していることは、エスカがマーカスを二度しっかりと見つめることにも表れている。観客席にいるマーカスがエスカを観察し評価するのみならず、エスカも舞台からマーカスを見つめ評価しているのだ。エスカにとって、個人化された観客はマーカスのみである。翌日自分を奴隷として希望する人物がいるときいたエスカは、それがマーカスだと直ちに理解し、素直に従う。このようにマーカスとエスカは、傷と痛みを通して、集合的レベルでは異なる出自と社会的立場を持ちながら、個人的レベルでは同類として結び合うのである。

4.3 手術

夏が終わりに近づくと、傷跡が赤く熱を持つ。ある日、傷は一日中痛み、マーカスの不調に気づいた伯父が、自分の友人で元軍医のスペイン人、ルフリウス・ガラリウスを呼ぶ。ガラリウスは負傷当時の処置の詰めが甘かったことを見抜き、早速翌日に手術を行うという。それを聞いたマーカスは、「痛みの臭いに震え」(shivering at the smell of pain)、胃が冷たくなり孤独を感じる。痛みは再び五感に関連して、そして初めて嗅覚を使って表現される。

²⁶ 中倉玄喜による解説、カエサル、86頁。

²⁷ 本村、171頁。

²⁸ 本村、175頁。

しかしエスカが狩りで連れ帰ったオオカミの仔チビ (Cub) がやってきて、「ミトラスの光が暗闇からわき上がった」 (The light of Mithras, springing out of the dark) かのような夕日に気づく。その光の中から、今度はコティアが現れ、励ましの声をかけ、再び光の中へ戻っていく。

手術の開始直前、ガラリウスがマーカスに声をかける。次の文の「長らくして、彼は暗闇から漂い出た」 (A long while later he drifted out of the darkness) は、既に手術後を表す。マーカスは負傷した時と同様に、意識のない世界から生の世界へ、闇から前日に見たミトラスの光へと帰還したのである。手術後の痛みは次のように表現される。

The ache of the old wound was changed to a jangling throb that seemed to beat through his whole body with a sickening sense of shock, and involuntarily he gave a little moan. (*The Eagle of the Ninth*, Chapter 8, 105)

右脚に局部的に集中していた痛みは、全身を貫く激しい痛みになっている。このように手術後の痛みは表現されるが、手術中の痛みは描写が欠落している。この物語における三人称の語りは、マーカスを焦点人物として彼が意識したものを中心に描写するので、マーカスは意識を失ったのだろう。手術後のエスカの顔に、吐きたくても吐くべきものが胃にない時のような表情があるのみである。手術は成功したが、一生跡が残り、脚は曲がったままである見込みである。

4.4 ワシ奪還中と奪還後

ワシ奪還の旅に出発後、ワシを手に入れるまでは、マーカスの右脚は時に厄介なものとなる。痙攣することもあれば、逃げる馬を走って追いかけてようにも力が入らないこともある。エビダイ族の神殿からワシを持ち出す際には、右脚を引きずって歩くため、すぐにマーカスのものとわかる足跡を入念に消

さねばならない。これらの脚に関する描写は、主にマーカスという負傷した人物のリアリティを増す効果を持つ。しかし、ワシをローマ領に持ち帰る逃亡場面においては、それまでマーカスという人物の属性として自然に言及されていた脚の痛みは、克服すべき第一の課題に変化する。険しい場所ではエスカの肩を借りねばならない。ポニーに乗っていても右脚に力が入らない。脚を休ませる必要があるため長時間歩いたり乗馬したりはできないが、反対に休みすぎると脚が強張ってしまう。この逃亡劇の中心的主題は、激しく追跡するエピダイ族から、いかにマーカスが痛む脚をもって逃げられるかである。こうしてハドリアヌスの壁にたどり着く時には、二人は満身創痍で、マーカスはエスカの肩にもたれかかり何とか歩いている状態である。

持ち帰ったワシを伯父に見せる際、エスカは解放奴隷の身分を気にして、伯父の書齋に入ることを躊躇する。マーカスは、エスカの奴隷の過去と自分の傷ついた脚についてこう提案する。

[...] You don't like being a freed-man, do you? Well, I don't like being lame. That makes two of us, and the only thing we can do about it, you and I, is to learn to carry the scars lightly.' (*The Eagle of the Ninth*, Chapter 20, 272)

二人は奴隷の過去と傷ついた脚を持つ点で同類である。いずれも取り返しがつかないが、だからこそその傷跡をなるべく気にしないことが最善かつ唯一の道である。伯父の家に戻ってからも、マーカスの脚は痛む。ワシを見せる時も、椅子に座らねばならない。そして冬中、逃亡中に酷使した脚に突然「復讐」(revenge)され、時に痛みで夜中に目を覚ます。再会したコティアも、マーカスが出発前よりも脚を引きずっていると指摘する。行進ができない状態では、軍に戻る事が不可能であることは、いよいよ明白である。

5 完治なき解決

このような完全勝利や完全治癒のない結末からすると、マーカスの傷と痛みとは一体何であったのか。キースは、19世紀半ばから20世紀初頭までの少女向け小説における障害の扱われ方を分析している。それらの物語には、事故や原因不明の病気によって麻痺などの身体的な制限を持つに至った人物が頻繁に登場するが、その登場人物たちは、最終的に完全に治癒するか死ぬかのどちらかである。治癒し、読者の期待に合うような結末を迎えるためには、登場人物は自らの道徳的欠点を正すなどして、違う人間に生まれ変わらねばならない。²⁹

キースが分析した障害の語りと比較すると、『第九軍団のワシ』の特徴がより明確になる。すなわち、障害はマーカスの内面にある否定的な要素の外的表現ではなく、本物の武器によって実際に負傷してできたものである。ワシ奪還に出発する前は、軍団司令官クローディウスと共に伯父を訪問した、貴族階級出身で前途有望な同年代の美貌の参謀将校ブライドスの姿に、「痛いほど自分の曲がった脚を意識」(painfully conscious of his twisted leg)もした。しかし、このような心理的劣等感は、探求開始後は存在しない。脚が痛む度に、痛む脚を持つに至る経緯、すなわち自分の負傷と敗北を思い出す可能性もあるはずだが、そのような描写はない。マーカスの負傷と痛みは身体的困難にしか過ぎず、ワシ奪還を実現するために懐柔しなければならない物理的一要素に過ぎない。むろん不利な身体的条件の下にワシ奪還を実現した結果として、マーカスは精神的強さも手に入れるだろうが、精神的強さを手に入れるために障害を持ちながら目標を達成するわけではない。またエスカも、傷の持つ物理的条件以外を気にする様子はない。マーカスを焦点人物とする三人称の語りであることだけがその理由ではない。二人が行うことは、ひたすら目の前の課題に集中することである。『第九軍団のワシ』は、傷と

²⁹ Keith, 5.

痛みを重要な主題としながらも、元来否定的であるからこそ結末で肯定的な何かに変換すべきものとしてそれらに過剰な比喩を負わせることはない。障害は挑戦も克服もされず、だからこそ最後に消滅もしない。障害は病気とは異なる。ワシを入手し逃亡する途中で隠れた村では、エスカは病気を装った。その際、隔離された小屋に滞在しても、治癒したといって出発しても、村人に怪しまれなかった。このように病気は治るが、マーカスの脚やエスカの奴隷の過去やワシの失われた翼は永遠にそのままである。この完治なき生を生きることが、マーカスとエスカが今後行うことである。

物語の最終章は「オリーブの木の鳥」(The Olive-Wood Bird)と題されている。『第九軍団のワシ』には鳥が様々な位相で登場した。戦闘中のマーカスは、「かかとに羽がついているかのよう」(as if his heels were winged) 駆け、伸びやかに指揮を執っていたが、負傷により飛べない鳥となった。翼をもぎ取られたワシは、名誉と威厳を奪われた第九軍団のみならず、軍人としての生命を絶たれたマーカスの姿でもある。ワシの奪還に出かけてまもなく、マーカスは小川のほとりで木製の小鳥を燃やし、生け贄として捧げた。この小鳥は故郷エトルリアで、オリーブの木の根を切り取り、マーカス自身が彫って作ったものである。この小鳥は、神への捧げ物であるのみならず、ローマ軍の兵士としての彼の人生の象徴でもある。まずこの時翼ある小鳥としてのアイデンティティが捨てられ、さらにワシの埋葬の際にワシ奪還に従事した翼を失ったワシとしてのアイデンティティも葬り去られるのである。

ワシを埋葬し、コティアとの結婚も決まり、ブリテンでエスカと共に農場経営することにしたマーカスは、最後にこの木の鳥を回想し、その灰から新しい生が誕生するのを感じる。そこにエスカが口笛を吹く音が聞こえ、マーカスは奴隷が口笛を吹かないことに気づく。多くのものが鳥や鳥に関連した比喩で語られるこの物語において、口笛を鳥の鳴き声と解釈するならば、これは真にマーカスと対等になったエスカの飛翔を示唆しよう。そして、今や共同の運命を生きることとなったエスカの飛翔は、間接的にマーカスの飛翔

をも表す。それは脚が治り軍に戻るという飛翔ではない。マーカスの傷は一生治らず、痛み続けるだろう。しかし傷と痛みを抱えながら、もとは異質な者たちと共に生きることが、この物語においては解決なのだ。こうして物語は、百人隊長として出陣し、ワシ奪還に出発し、今また新たな暮らしを開こうとするマーカスの出立を提示して閉じる。

参考文献

- ユリウス・カエサル『新訳 ガリア戦記』中倉玄喜 翻訳・解説 PHP研究所 2008年
- 川北稔 編『新版 世界各国史 11 イギリス史』山川出版社 1998年
- 日本イギリス児童文学学会 編『英語圏諸国の児童文学』全2巻 ミネルヴァ書房 2011年
- 南川高志『海のかなたのローマ帝国 古代ローマとブリテン島』岩波書店 2003年
- 本村凌二『帝国を魅せる剣闘士 血と汗のローマ社会史』山川出版社 2011年
- Gerber, David A., ed. *Disabled Veterans in History*. enlarged & revised ed. Ann Arbor: University of Michigan, 2012 [2000].
- Good, Mary-Jo Delvecchio, Paul E. Brodwin, Byron J. Good, and Arthur Kleinman. *Pain as Human Experience: An Anthropological Perspective*. Berkeley, Los Angeles & London: University of California, 1994.
- Keith, Lois. *Take Up Thy Bed and Walk: Death, Disability and Cure in Classic Fiction for Girls*. London: Women's Press, 2001. (ロイス・キース『クララは歩かなくてはならないの? 少女小説にみる死と障害と治癒』藤田真利子訳 明石書店 2003年)
- Moscoso, Javier. *Pain: A Cultural History*. Basingstoke & NY: Palgrave, 2012.

- Scarry, Elaine. *The Body in Pain: The Making and Unmaking of the World*. NY & Oxford: Oxford UP, 1985.
- Sutcliff, Rosemary. *Blue Remembered Hills: A Recollection*. London: Bodley Head, 1983. (ローズマリ・サトクリフ『思い出の青い丘 サトクリフ自伝』猪熊葉子訳 岩波書店 1985年)
- . *The Eagle of the Ninth*. Oxford: Oxford UP, 2012. (ローズマリ・サトクリフ『第九軍団のワシ』猪熊葉子訳 岩波少年文庫 2007年)
- Thomas, Keith. *The Ends of Life: Roads to Fulfilment in Early Modern England*. Oxford: Oxford UP, 2009. (キース・トマス『生き甲斐の社会史 近世イギリス人の心性』川北楢訳 昭和堂 2012年)